

岡山県東部方言のアクセントの成立過程

中澤光平

本発表は、岡山県東部方言のアクセントの成立過程について、発表者の調査データを基に考察する。

岡山県東部の日生（ひなせ）や寒河（そうご）で話される方言では、アクセントに基づく語彙分類である金田一語類（上野 2006 「日本語アクセントの再建」『言語研究』130）のうち、2 拍名詞の 2 類と 3 類が区別されることで知られている（中井 2002 「岡山県寒河方言のアクセント」『消滅に瀕した方言アクセントの緊急調査研究 3』）。具体的な音調では、2 類は HL のような頭高型（1 型）なのに対し、3 類は LH(-L) のような尾高型（2 型）で現れる。3 拍名詞でも、2 類は概ね 2 型に対応し、4 類の 3 型と対立している。京都や大阪などの中央式（上野 1987 「日本本土諸方言アクセントの系譜と分布(2)」『日本学士院紀要』42）では、2 拍名詞の 2 類と 3 類、3 拍名詞の 2 類と 4 類がそれぞれ合流している。この合流は東京や広島市などの中輪式でも生じていて、中輪式が中央式に系統的に近いことを示唆するが、岡山県東部方言は、中央式の段階を経なかったことを示している。

岡山県に地理的に近い広島市のアクセント（馬瀬良雄 1994 『広島市方言アクセント辞典』より）は中央式の下降位置が規則的に 1 拍後ろにずれているのに対し、岡山県東部では 2 拍 2 類と 3 拍 2 類で下降位置が中央式と同じであることがわかる。これは、HL > LH(-L) や HHL > LHH(-L) のような尾高型への変化が岡山県東部では生じなかったことを示しており、2 拍 3 類や 3 拍 4 類の尾高型は *LL > HL > LH(-L), *LLL > HHL > LHH(-L) という変化ではなく、低平調から直接変化したと推定される。

2, 3 拍名詞と同様の対応が、例外はあるものの 4 拍名詞にも認められる（例：「金持ち、唇、杯（さかずき）、…」：「剃刀、雷、一日（ついたち）、…」）ことから、岡山県東部方言の尾高型は祖形の低平型に対応し、LLLL > HHHL のような合流は生じなかったと推定される。